

# 石濱純太郎を中心とした東洋語学の系譜

——川崎直一の手紙から——

玄 幸 子

## Genealogy of Oriental Languages with a Focus on Juntaro Ishihama-From the Letters of Naokazu Kawasaki

GEN Yukiko

Naokazu Kawasaki (川崎直一), well-known as a leading scholar of Esperanto, also promoted collaborative research with Juntaro Ishihama (石濱純太郎) in the field of modern oriental languages. Through the 20 letters and 100 postcards from Kawasaki to Ishihama, centering on the compilation of "Daitoa gogaku sōkan (『大東亞語學叢刊』)" and the activities of the Osaka Philological Society (大阪言語学会), this study reveals the reality of the oriental language academic world of that time, mainly before and after World War II, from 1941 onward.

キーワード：石濱純太郎 (Juntaro Ishihama)、東洋語 (Oriental Languages)、  
川崎直一 (Naokazu Kawasaki)、石濱文庫 (Ishihama Library)

## 1 はじめに

東洋学のパイオニアとされる石濱純太郎についてはもはや贅言を要しないであろう。筆者はすでに石濱文庫に所蔵される書簡資料（葉書を含む）から石濱純太郎を中心とした日本東洋語学の歩みの実態をある程度明らかにしてきた<sup>1)</sup>。今回は川崎直一の書簡・葉書を取り上げ、特に東洋語学関連書籍の出版事情などを具体的に見ていきたい。

また川崎直一といえば、真っ先に「エスペラント」研究の第一人者とのイメージが先行するが、書簡から見える石濱純太郎との交流を通して東洋言語学へも大きな貢献をした人物のひとりであったことがあさらかになった。本稿ではこのような川崎自身の人物像にも迫ってみたい。

調査検討の対象とする書簡は大阪大学総合図書館石濱文庫所収のクリアファイル 20 冊に収められた書簡と差出人ごとにまとめられた葉書である。書簡に関しては（クリアファイル冊数）-（整理番号）でその所在を示すことができるが、葉書に関しては消印などで明確になっている差出年月日のみが唯一の分別マークとなる。今回対象とした書簡は全部で 20 通、葉書は 100<sup>2)</sup> 枚である。

## 2 川崎直一について

まずは藤本達生「川崎直一先生略歴」<sup>3)</sup>によって概歴をまとめると次のとおりである。

明治 35（1902）年 1 月 31 日生 - 平成 3（1991）年 1 月 18 日逝去（満 88 歳）

学 歴

1919 年 大阪府立市岡中学校卒業

1921 年 早稲田大学高等予科・文学科 第 2 学年修了

1922 年 同文学部・フランス文学科 ～11 月在学 以後数年間静養

1) 拙著「石濱文庫収蔵書簡に見る仏英調査旅行関連資料について」『東西学術研究所紀要』第 53 輯 2020. 04 p.117-128；同「石濱文庫所収書簡資料に見る明治三九年～昭和三〇年代の漢学 - その一 石田幹之助書簡を通じて」『東西学術研究所紀要』第 54 輯 2021. 04 p.29-53；同「書簡から見る石濱純太郎と東洋言語学者たち - 泉井久之助ほか訳著『世界の言語』編纂過程を取り上げて」国際シンポジウム論文集『内藤湖南と石濱純太郎 - 近代東洋学の射程』（関西大学出版部 2023. 03 月 p.179 (39)-204 (64)) 所収

2) 書簡クリアファイル No.1504 に混入している S 18. 7. 5 付 1 通を含む

3) 川崎直一『愛あるところ神あり』（1992 年 3 月 31 日出版復刻版、初版は 1930 年 7 月 31 日）所収

- 1932年 (静養後1927年～) 大阪外国語学校ドイツ語部別科修了  
 1935年 同ロシア語部選科卒業<sup>4)</sup>  
 1937年 同支那語部<sup>ママ</sup>前科修了<sup>5)</sup>

#### 研究歴

- 1919年 エスペラント学び始める  
 1933年7月 Lingva Komitato (エスペラント言語委員会) の会員となる<sup>6)</sup>  
 1937年4月-42年6月 泊園書院に通学 漢学特に説文を研究<sup>7)</sup>

#### 職歴

- 1942年7月 「大東亜通信」(新聞社発行) フランス語・ドイツ語・ロシア語の外国新聞雑誌からの翻訳(アルバイト)の業務に当たる<sup>8)</sup>  
 1944年7月 大阪外事専門学校の西南亜細亜研究所にてアラビア語辞典の事務嘱託となる  
     9月 大阪青年教育部にて夜間、ドイツ語を教授する<sup>9)</sup>  
 1945年3月 大阪外事専門学校事務さらに講師の嘱託となる<sup>10)</sup>  
 1947年12月27日 「任文部教官」となり「大阪外事専門学校教授に補」される  
 1948年12月29日 大学設置審議会に合格(教授、ビルマ語学、言語学)  
 1949年6月30日 大阪外国語大学教授になる  
 1951年3月31日 大阪外国語大学教授(専任)となる

- 
- 4) S 15. 3. 1 付葉書に「ロシア語卒業の時ぜひモーコ語部へはいろいろと思ったのですが、身体が悪かったので止めました。」とある。  
 5) 注7) で言及する書簡5-597の中で川崎自身は「昭和12年3月大阪外語別科中国語卒業」と記している。ここは誤植であろう。  
 6) 同委員会は1950年5月、Akademio de Esperanto (エスペラント学士院)と改称、よって亡くなるまで Akademio の会員。  
 7) この経歴に関して書簡5-597 (S 28. 11. 18) では履歴を埋めるため「泊園書院在学 説文研究」をしていたことの証明書を出してもらいたいとの依頼をしている。  
 8) 書簡3-345 (S 17 (1942). 3. 13) に「宮武君の世話で「工業新聞社」にシヨクタクとして私と笠井君がはいることになりました。仕事はフランス語、ロシア語新聞(佛印、極東)の記事のホンヤクで、それが「大東亜通信」に載るわけです。月給50円。原稿料は出来高とのこと。もちろん出勤はいたしません。」とある。  
 9) S 19. 7. 11 付葉書に「大阪青年会教育部のドイツ語を一晩だけ9月から教えることにしました」との報告が見える。  
 10) この間の消息は書簡6-672 (S 20. 2. 1) に詳しい。一部引用すると「大阪外事専門学校圖書課事務嘱託は3月1日より、ロシア語講師は4月1日よりです。事務嘱託は兼職を禁ずるとて夜学(青年会)も止めることになりました」とある。

## 非常勤・併任講師など省略

1967年3月31日 停年退職

4月1日 奈良大学教授

1977年3月 同大学停年退職

(退職後の非常勤講師歴などは省略)

以上が川崎直一の略歴である。略歴執筆者の藤本達生氏は松原八郎提供の「勤務記録カード」によってまとめたものであり、大学の正式名称などは記録によるものが正しいと思われるが、川崎自身の言及がある場合には注に挙げておいた。

さて、以上の略歴からも川崎が典型的なポリグロット (polyglot) であったことがわかる。フランス語、ドイツ語、ロシア語、中国語、アラビア語、ビルマ語と実に多様な言語を習得していたのであるが、このうち東洋語とのかかわりは石濱純太郎宛の書簡・葉書から具体的にみることができる。中でも石濱純太郎との共同研究活動は主に大きく2件認められる。ひとつは『大東亞語學叢刊』の編集であり、もう一方は大阪言語学会の活動である。以下にこの2つの活動について詳細を明らかにしていく。

## 3 『大東亞語學叢刊』の編集と出版

『大東亞語學叢刊』は朝日新聞社が昭和16年に編集を企画、第1冊『マレー語』第2冊「樺太ギリヤク語」の2冊のみ出版されたが、その後継続せず立ち消えてしまったシリーズである。書名が正式に決まる前までは『亜細亞語学双刊』とも称していたことが川崎ほかの書信からわかる。昭和16年5月13日に大久保恆次(朝日新聞大阪本社)から石濱宛に大東亞語學叢刊の執筆者へ送付済み招待状通知が送付されている<sup>11)</sup>。また、青木文教など執筆予定者の書簡<sup>12)</sup>からも執筆要綱が送付されていたことが見て取れる。

11) 書簡 6-676 (S 16 (1941). 5.13 封筒裏 15 日付け). 朱で「昨日速達便でこれと同文のを出しておきました 大久保恆次」と添え書きがあり、「五月十七日(土)午後四時より/京都岡崎つるやにて」打ち合わせ会を開催、ご挨拶を申し述べたくご来駕を願いあげるとの内容の招待状文を報告している。また同封のハガキにて出欠の返信を求めているが、宛先リストおよび出席者詳細は不明である。5月13日付で差出人は石濱純太郎に続けて朝日新聞出版局 小倉敬三/大塚貞三 としたようである。

12) 書簡 3-321 (S 16 (1941). 7. 4) に「先般朝日新聞社アジア語学叢刊の執筆要綱御送付を辱ふし、執筆にとりかゝり候 ローマ字記号の件に関し度々河崎様の御考慮を煩はし大体判明致し候へども尚ほ少しく疑念も有之。且つ一度先生に御伺ひ致し度き件をも兼々機を見て拝眉の榮を賜はり度しと存候」云々(原文縦書き)とある。

では、以下に『大東亞語學叢刊』に関連する川崎の書簡および葉書を紹介する。

書簡 2-228 (S 16 (1941). 5.26)<sup>13)</sup>

26 日朝校正刷<sup>14)</sup>を受け取りましたから、お届けします。ご訂正の上

朝日新聞社大阪本社

出版局編集部

橋本周藏氏

にお送りください。

Kawasaki-N

宮武氏 木曜午後 先生を訪問<sup>マア</sup>のはず。

ギリヤーク語の解説 (川崎筆) は昨日高橋先生に訂正していただきました。

\*宮武氏とは「大東亞語學叢刊」第1冊目の『マレー語』の著者である宮武正道のことであろう。高橋先生は高橋盛孝、『大東亞語學叢刊』第2冊目『樺太ギリヤク語』の著者である。

S 16 (1941). 6. 1

1 日朝

編集要項再校まだきません。

泉井、澤両氏より内容見本用の言語解説の訂正を受け取りました。

やはり波斯語でよいとのこと。実は十年ほど以前 大阪外語教務課長より「イラン語と改むべきでないか」との相談を受けたが、イラン語は言語學上もっとも廣い意味であるし、ペルシャ人もペルシャ語と言っているし、古代を想像することもできるので、「その必要なし」と言ったとのこと。

トルキスターンと訂正されました。

\*編集要項再校は『大東亞語學叢刊』に関する報告であり、泉井(久之助)、澤両氏からうけとった訂正については『世界の言語』に関するものであろう。澤英三は『大東亞語學叢刊』『ペルシア語』『インド語』の執筆予定者でもあった。

13) 以下書簡は、ファイルの冊数-通し整理番号(差出年月日); 葉書は差出年月日のみを記す。書簡・葉書の本文はゴシック体で表示し考察部と区別する。

14) 『世界の言語』に係る校正であろう。『世界の言語』は『大東亞語學叢刊』とほぼ並行して編纂作業が進められていた。詳細は注1)に挙げた玄2023参照。また書簡8-859の内容から橋本周藏(大阪朝日出版局)が『世界の言語』の担当であったことがわかる。

S 16 (1941). 6. 3

明 4 日 (木) 午後 4 時すぎ

中野英治郎氏

をつれてゆきます。

Kaw.

\* 中野英治郎は『大東亞語學叢刊』『アラビア語』の執筆予定者であったが、後述の通り、病死してしまう。

S 16 (1941). 6. 18

18 日

今朝安住氏訪門。紹介の電話で

江尻氏

を訪門。明木曜午後 2 時先生のところへ連れていきます。

やはり「文字」をやかましく言います。「本国からとりよせるのはなんでもない」と申します。

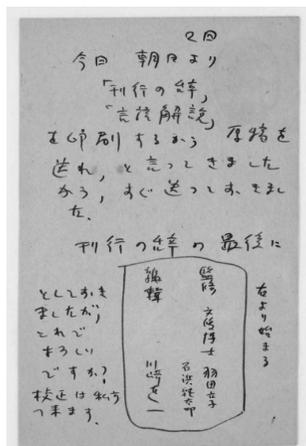
あまり音声學，言語學方面はわからない様子。

Kawasaki. N.

\* 江尻英太郎は『大東亞語學叢刊』『タイ語』の執筆予定者であった。

S 16 (1941). 7. 2

2 日



今日 朝日より「刊行の辞」「言語解説」を印刷するから原稿を送れ、と言ってきましたから、すぐ送っておきました。

刊行の辞の最後に

監修 文學博士 羽田亨

石濱純太郎

編輯 川崎直一

としておきましたが、これでよろしいですか？ 校正は私方へ来ます。

\* 出版後「刊行の辞」「言語解説」は削除されたものか、見当たらない。また、本文最後にあるのは、次のとおりである。

「大東亞語學叢刊」

監修 羽田 亨

編輯 石濱純太郎／<sup>15)</sup>川崎直一

校正 笠井信夫

消印不明

12日

今朝日からよびだしあり、早速出頭しました。

「亜細亞語学双刊」はすこしおくれたので、急の間に合わせるためポケット型の語学双書をだしてくれとのこと。50ページで、30センチぐらいのもの。単語が主で、簡単な会話<sup>16)</sup>。このごろは毎日御在宅ですか？

それから吉町、「ビルマ語」もぜひ「亜細亞語学双刊」に入れたいと申しております。

〔笠井氏には朝日から今日電報を打ちました。〕<sup>17)</sup>

\* 消印が不明で差出年月がわからないので、内容から考えてここに配列する。吉町は当時九州大学在職中であった吉町義雄であろう。「ビルマ語」は出版予定に入ったものの、予定担当は矢崎源一郎であった。吉町義雄は「大東亞語學叢刊」執筆予定者には入っていない。

S 16 (1941). 7. 6

タイ語講習会の近くあることですから、江尻氏に一度會って話してみます。そのうえ大

15) 本稿では「／」は改行を示す。

16) 『日用南方語叢書』(朝日新聞社発行)として昭和17年~18年に「マレー語」(1)「タガログ語」(2)「安南語」(3)「タイ語」(4)「ビルマ語」(5)が出版されており、このシリーズを言ったものではないかのご指摘を長田俊樹先生から受けた。正確にはページ数など一致しないが、内容他からこれを指したものである可能性は高いと思われる。S 17 (1942). 3.7 付葉書に「タガログ語文法(原稿紙8枚)を書くことになりましたので、泉井氏から文法書を借りるよう、頼みました。／火曜の夕の会(いやや)へ先生御所有のタガログ語辞書ご持参ください。(先日拝見したもの)。／宮武氏より、「早くだせ、よい加減でよい。當分の間に合えばよい。」と言ってきました。うまくゆけば3月中に本になるかもしれません。／[添え書き略]とあり、S 17 (1942) 7.27 付葉書に「タガログ語(日用南方語双書)校了になりましたので、拜借中のタガログ語字書 別便で送りました。／日用南方語双書:安南語(校正中)／タイ語／ビルマ語(印刷所に／原稿あり)／ジャワ語(橋田氏執筆中)／以下略」とあり、さらに後掲のS 17 (1942). 10.2 付け葉書に原稿料受け取りの報告など見える。

17) この文添え書き。以後、添え書き部分は〔 〕で括って示す。

久保氏が歸れば「辞書」の話をしてみましょう。「亜細亜語學双書」の方の原稿料（印税）の前拂はほかの執筆者の都合もあるし、「300円をいますぐ渡してくれ」との話はちょっとどうかと思います。

吉町氏 安南語辞典 編集中とのことです。

\*大久保氏というのは前述の大久保恆次（朝日新聞大阪本社）の事かと思われる。

S 16 (1941). 7. 7

7日

今日江尻氏住吉駅まできました。「ぜひ誤解をときたい」と申しています。で、安心するよう言っておきました、すなわち「謝礼の事はまだ新聞社から具体的の話がないが、いずれそのうちきまることと思う」と。

「研究史概要」が苦手らしく「文學概略」を書きたいと言っています。

Kawasaki. V.

タイ語講習会 22日より火、木、土、3カ月あるよし（大谷会館）

S 17 (1942). 1. 31

31日

今日午後 江尻氏をつれて朝日へ行きました。大久保、橋本、笠井、藤間氏に面会。江尻氏は内金として300円受け取りました。

「小語學」のほうは日本語から引くのですが、笠井氏の発案で、外国語より日本語を引くものもこしらえることになりました。

\*執筆者に係る諸問題解決に川崎が当たっていたことがよくわかる2通である。大久保、橋本、笠井、藤間氏とは、前述の朝日新聞出版の大久保恆次・橋本周藏と「安南語」担当予定だった笠井信夫であろうが、藤間氏については詳細不明である。次の川崎書簡 15-1681 に朝日大陸双書第2輯（石浜氏編）に参加希望している旨、言及がある。

書簡 15-1681 (S 17 (1942). 2. 16)

昨日の宮武氏の話。

- 1, 泉(?) タイにおった坊さん、タイ語がよく読め、横須賀でタイの軍艦を作ったとき、タイ字を書いた人。この人が大東亞通信のタイ新聞を引受けます。この人はまた五年ほど前にタイ日辞典を完成したとか。

## 2, 岡島誠太郎氏

マールボロをホンヤクしました。(シリアのアラビア語) これは宮武君の世話でどこからかでのとのこと。

なお彼氏は Horder, Hrabish-Dentsch Wurtor buch をホンヤクしたい意向

## 3, 宮武正道氏

こんどは単語は重要なものだけに限り, 実用的用例文を入れた辞書をつくりたい。

朝日小辞典双書 なんとかならないでしょうか? モーコ語も加ってもよいし…

朝日大陸双書第2輯(石浜氏編)<sup>18)</sup>には藤間氏も参加したい由。「短いものをホンヤクしたい」

宮武マレー語(双刊)

索引 初校のみ

アラビヤ文のところ まだできません

やはり校了は20日ごろでしょうか?

\*朝日小辞典は何ともならなかったのか、現在叢書として確認できるものが見つけれられない。また、大陸叢書についても、第2輯編纂までいかなかったようである。一方第1冊目出版となる宮武正道『マレー語』はこの後順調に進みほぼ2ヶ月後の同年4月20日に出版される。

## S 17 (1942). 3. 12

宮武正道/川崎直一 共訳, Brandstetter, Introduction to Indonesian Linguistics, p.350<sup>19)</sup>

川崎直一訳, Kruisinga, A Grammar of modern Dutch. P.168<sup>20)</sup> (ただし両書とも未完

18) 大陸叢書(朝日新聞社 1939. 12-1942. 3)は全9巻でたようである。詳細は『ゴビよりヒマラヤへ』第1巻 F. E. ヤングハズバンド著 [他] 昭和14 info: ndljp/pid/1265166; 『沙漠の蒙疆路』第2巻 オウエン・ラテモア著 [他] 昭和15 info: ndljp/pid/1265169; 『支那の幌子と風習』第3巻 ルキーズ・クレーン著 [他] 昭和15 info: ndljp/pid/1265172; 『科学者の韃靼行』第4巻 ウイルヘルム・フィルヒナー著 [他] 昭和15; 『南支遊歴記』第5巻 ハリー・フランク著 [他] 昭和16 info: ndljp/pid/1265163; 『満洲踏査行』第6巻 ヘンリー・ヂェームズ著 [他] 昭和16 info: ndljp/pid/1244346; 『中央亜細亜の古跡』第7巻 オーレル・スタイン卿著 [他] 昭和16 info: ndljp/pid/1265165; 『南満騎行』第8巻 ジョージ・フレミング著 [他] info: ndljp/pid/1217745; 『キルギスよりアムールへ』第9巻 T. W. アトキンソン著 [他] 昭和17 info: ndljp/pid/1877994 以上の翻訳者は指田文三郎、大江専一などで石濱純太郎とはほぼ交流はなかったと思われる。よって第2輯の編集は実現しなかったと考えてよからう。

19) Renward Brandstetter, An introduction to Indonesian linguistics, 1916, Royal Asiatic society

20) Kruisinga Etsko, A grammar of modern Dutch, 1924,

成)

先日お話の全国書房にお世話願えませんでしょうか？ 実は宮武氏が生活社にあたったのですが、京都主任が転任になって駄目になりました。

大東亜語學双刊の内容見本のどこかにシナ語は倉石、吉川両氏カントクとて倉石氏の注音符号のことなどちょっとでもいわないといけないのではないのでしょうか？

[一ページでも倉石氏に書かしては？]

\*倉石武四郎と吉川幸次郎が石濱の意向を受けてシナ語部分を采配していたことは、倉石書簡および吉川書簡から見て取ることができる<sup>21)</sup>。高倉克己・小川環樹・呉守禮の三名に割り当てた模様が記されている。

書簡 3-345 (S 17 (1942). 3. 13)

13日夜

原稿拝見。たいへん結構です。ことに最後のところ、これを印刷したら、立派な証文になります。

宮武君の世話で「工業新聞社」にシヨクタクとして私と笠井君がはいることになりました。仕事はフランス語、ロシヤ語新聞（佛印、極東）の記事のホンヤクで、それが「大東亜通信」に載るわけです。月給 50 円。原稿料は出来高とのこと。もちろん出勤はいたしません。

明日の日曜に宮武君と相談の上最後の決定をします。ただし「アジア民族研究會」とか

21) 吉川幸次郎 S 16 (1941). 5. 25 付葉書に「……去る卅一日に疲勞困憊して歸洛仕候。高倉君呉君とも引受て呉れる様子。但し相共に餘裕を與へてほしき模様には有之候。先ハ右御詫迄。匆々。廿四日／倉石君とも今日面談大体をき、候」とあり、倉石武四郎 S 18. 8. 22 付葉書には「敬啓お目にかゝると語學叢刊のことで叱られさうな氣がしてゐますところ支那學論攷ご恵投くださいませまづ飴をなめさせられたのかと冷や冷やしてゐます。しかしおいしい飴でことに前の方は面白く讀ませていただきましたが石濱先生全集が世に編まれる頃には支那學初号がもう古代史になってゐたのだとつくづく感じました。ありがたく御礼を申し上げます。叱られない中に高倉君が携つてゐますので至急まとめもらふ様に二回ほどいろいろ案をしておきました。蘇州語も小川君がやつと奮起したのでありがたいんですが雜賀氏にあまりたのみすぎた後で。どう調和するか頭痛の種がふえました。匆々」また、S 20. 1. 22 付葉書に「可怕の御督責穴ばかりの此ごろながら入るべき道もなくなつた。慚愧に不堪候。たゞし高倉克己君より十二月廿八日付の手紙有之。「延引延引を重ねたる朝日語學叢書の件今頃出だすは既に証文の出しおくれかと存じ候が目下整理中につき来春歸國までには必ず完成の心算に候」と有之。これを証文に代へ度丁度その頃になれば蘇州語の方も小生及ばずながら中心となり雜賀氏小川君その他を羽翼としてまとめ申度。たゞ今は専ら昨秋吹きこみしレコードの到着を鶴首いたし居る所に御座候。先は右とりいそぎお返事のみ。匆々。一月三十日」とある。

の政治団体には加入いたしません。

以上

Kawasaki-N

\*この原稿が何の原稿であるのか証する手立てはないのであるが、恐らく宮武『マレー語』に寄せた序文であろう。序文中にエスペランチスト宮武正道が一種の国際語と言えるマレー語に早くから精通し「大東亞海の国際補助語マレー語文典を書いてくれたことを感謝する」(VIII頁)とあるのに川崎が大きな共感を覚えたのだらうと推測される。次の書簡中に「序文校正拝見」とあることからほぼ間違いのないと思われる。

書簡 4-432 (S 17 (1942). 3. 16)

序文校正刷拝見, 早速訂正いたします。

大東亜通信のこと昨日笠井君同席 宮武君と話し合いましたが、まだはっきり条件がきまりません。私はもし政治的, 実践的な方面を要求せられるのなら, やめます。ホンヤクだけならよろしいが…

マレー語早わかり (朝日の小) 校了

日本語早わかり (マレー語書き) を編輯しています。

Kawasaki-N

\*序文は『マレー語』の序文であろう。この「～語早わかり」というのは前述の「朝日の小辞典双書」のひとつであろうか。詳細は不明である。

S 17 (1942). 3. 20

20日

19日午後5時前「大東亜語學双刊マレー語」全部校了になりました。予定のとうり4月1日にでそうです。

月曜日に朝日で宮武氏を招き, 組方, <sup>ママ</sup>かなずかい, など相談いたします。

\*全校了から10日前後で出版というのは、現代の感覚からすると随分早いような気がする。ましてや、組み方、仮名遣いの相談をこれから<sup>22)</sup>というのだから、無理があろうかと思うが、川崎の心積もりでは予定通り (?!) 4月1日に出版できるということであった。が、実際出版されたのは校了からほぼ1か月後の4月20日であった。

22) S 17 (1942). 3. 20は金曜日であったので、相談予定の月曜日は3月23日である。

S 17 (1942). 4. 8

8日

江尻氏より原稿到着。すっかり書きかえて、今度はきれいですが、一度全部読まなければなりませんから、いますぐ印刷所にまわせません。それまでにすくなくとも高橋氏の第一冊（文法篇）だけでもまず組みたいです。

今日外語で澤氏に會いました。「外の人もまだ書いてないし…」なんて言っていました。アラビア語は千五百種でその中五百種だけできたとか。デバナガリも作る予定で、丸善のプルシカ語はアラビア字を、朝日のはデバナガリでやるとのこと。

中野氏は退院、岸和田で保養中、来月から學校に出てくるとのこと。

〔外語にタガルグ文法一冊ありました。マズラ、サンギルなどもあります。〕

\*江尻英太郎『タイ語』の原稿が到着したものすぐに印刷にまわさず、高橋盛孝『ギリヤク語』の組版にとりかかりたい旨を伝える内容であるが、その他の進捗状況は、『インド語』『ペルシア語』担当の澤英三の言から、ほとんど進んでいなかった様子が推察される。さらに『アラビア語』担当の中野英治郎が退院保養中であったことがわかる。

この後、昭和17(1942)年4月20日付で、第1冊目の宮武正道著『大東亞語學叢刊 マレー語』が出版される。当時「大東亞語學叢刊」がその後どのように展開していく予定であったのかを見るために巻末の刊行予定広告を以下に引用しておく。

京大講師	三田村泰助	「滿洲語」
關西大學教授	高橋盛孝	「樺太ギリヤク語」(近刊)
立命館大學教授	高倉克己	「北京語」(近刊)
東北大助教授	小川環樹	「蘇州語」
	吳守禮	「厦門語」
天理外語教授	鄭兆麟	「廣東語」
臺灣中央學院	江 實	「蒙疆蒙古語」
東大講師	服部四郎	「新バルガ蒙古語」
外務省囑託	青木文教	「チベット語」
	笠井信夫	「安南語」
	江尻英太郎	「タイ語」(近刊)
臺北大教授	淺井惠倫	「タガログ語」(フィリッピン)
京大助教授	泉井久之助	「チヤモロ語」

	宮武正道	「マレー語」(既刊)
臺北大教授	浅井惠倫	「ジャワ語」
關西大學講師	矢崎源九郎	「ビルマ語」
大阪外語教授	澤英三	「インド語」
大阪外語教授	澤英三	「バルシア語」
大阪外語教授	中野英治郎	「アラビア語」
回教圏研究所長	大久保幸次	「トルコ語」
關西大學講師	石濱純太郎	「ウズベック語」
	川崎直一	「キルギス語」

ところがこの予刊広告は第2冊『樺太ギリヤク語』で修正され執筆者の変更がさほど時を置かずに行われる。詳細は後述する。

#### S 17 (1942). 7. 8

ギリヤク序文受とりました。

##### 第8枚目

Лев Алпатов: Сахалин (Путевные ЗапискиЭтнограф),

Москва, 1930 とありますが、これでよろしいのですか？

\*誤植の指摘確認である。出版後の同箇所は下線部が“рафа”と改められている。

#### S 17 (1942). 7. 15

江尻氏の書いたタイ字表(凸版用)がきたなくて駄目と朝日では言いますので、昨日また橋本、笠井氏と安住氏を訪ね、工業大學生のタイ人を紹介してもらいました。この人にはまだ会えませんが、工科のことゆえ字はきれいに書くかもしれません。あるいはタイ字の活字を作るかもしれません。いずれにしてもタイの印刷はすこしおくれます。

\*先の刊行予告で「近刊」とあったのは、『樺太ギリヤク語』『北京語』『タイ語』の3冊であったが『タイ語』については、どうやら文字の問題が大きかったようである。

#### S 17 (1942). 7. 20

21日

今朝朝日へ行きました。結局印刷所と相談してうまく凸版のできるよう、多少江尻に書き改めてもらうことにしました(抜けているところを補ったり、一ページにうまくおさま

るようにしたり)

江尻から昨日新正字法に改定するから原稿を直せと言ってきました。しかし新旧両方とも書いておいたほうが便利と私は思います。

[中野英治郎氏亡くなられたので、アラビア語は誰にしますか？岡島誠太郎はダメですか？]

\*『タイ語』文字の問題を継続報告しつつ、ここでは『アラビア語』担当の中野英治郎逝去の訃報と共に担当者変更に関する相談内容である。この後担当者決定までには少し時間が必要であった。

書簡 1-96 (S 17 (1942). 8. 30)

「ギリヤーク」本文校了にしました。

索引がまだ組んできません。

同封の校正刷ごらんください。(未定)にしますか、(交渉中)にしますか？

校正刷は

(住所省略)

笠井信夫

へお送りください。

\*この後昭和 17 (1942) 年 10 月 30 日付で高橋盛孝著『大東亜語學叢刊 樺太ギリヤク語』が出版された。後掲の S 17 (1942). 10. 31 付け葉書の文面からわかるように初版は 2500 部だったようだ。

さて、この時点で以後の刊行予告が改正されているので、とりわけ改正部分に焦点を当ててみよう。変更は次のとおりである。

1. 「北京語」担当の高倉克己の所属立命館大學教授が削除される
2. 「蒙疆蒙古語」「新バルガ蒙古語」とあったものが「蒙古語」に統一され服部四郎が執筆者から外れ、江實と小島武夫の共著となっている。
3. 「ビルマ語」担当の矢崎源九郎の職位關西大學講師が削除される
4. 「アラビア語」担当の中野英治郎削除の後空白となっている

高倉克己は 1953 年の大阪市立大学中国学専修の創設時の教員として神田喜一郎 (文学)、本田濟 (哲学)、香坂順一 (語学)、西野貞治 (文学) とともに名前があげられるが、立命館を辞した後のほぼ 10 年間の年譜については今のところ調査不足である。当時は北京に在住してお

り、この間の執筆依頼については前述の倉石・吉川両書簡に詳しい<sup>23)</sup>。

蒙古語に関してはS 17 (1942) (1942). 3. 10付江實の葉書に「さて、例の文法の件、勇をコシ、兎島武男氏と共作にて、ただし精々アト一ヶ年内に刷り上りの程度で、やらしていただけたらと考へて居ります。(同氏の快諾はえました、)したがって規則書を東京駿河台東亜研究所同氏に至急御送付願ひ上げます。」(部分引用)とあるので、この時点ですでに変更があったものと思われるが、『マレー語』の刊行予告に反映するのに間に合わなかったのであろう。服部四郎へは正式に依頼をしたものか詳細不明である。書簡5-493 矢崎源九郎書簡に「今日服部先生にお目にかかり、「アジア語学叢刊」のことをお耳に入れておきました。」とあり消印が不明瞭にて差出時期がわからないが、書名も「アジア語学叢刊」とあり、非常に曖昧模糊とした状況で、恐らく服部四郎は正式な依頼を受けてなかったのはなかろうか。服部四郎書簡から明確になりうるか、待考としておく。

「ビルマ語」担当の矢崎源九郎であるが、S 18 (1943). 10. 28付葉書に、「…私もお陰様で、本年九月卒業いたしましたして、引續き副手として研究室に参つてをります。そのかたはら、慶應へも参りまして、ビルマ語の講座を受け持つてをります。なほ、かゝる時代でありますから、陸軍大學校嘱託をも兼ねて、圖書の整理にあたってをります。このやうに順調に行つてをりますから、御安心下さい。…(中略)…/ビルマ語の文典の方もできるだけ早く書き上げたいと思つてをります。川崎さんはじめ、皆様によろしくお傳へ願ひます」とあり、この文面から『マレー語』出版時の情報では在学時代に關西大學講師をしていたことになるが、当時の大学講師の担当資格は今ほど厳密に審査されるようなことがなかったと思われる。

中野英治郎は昭和16(1941)年10月に明治書房から『アラビア紀行』を出しているが、前述の通り惜しいことに早逝してしまい、その後の予定者が決まらないまま空白となっている。

## S 17. 10. 2

日用南方語双書 タイ語

〃 タガルグ語(文法ノミ)<sup>24)</sup>

原稿料120 頂きました。

大阪の日本出版社から大矢氏の

23) 注21) 参照

24) 「日用南方語双書」(朝日新聞社編)は注16)で言及した通り、朝日新聞社編となっており著者などの情報を記さない。この葉書の文面から『タイ語』・『タガルグ語』(文法ノミ)を川崎が著述したことが知れる。なお第2『タガログ語』(S 17); 第3『安南語』(S 17); 第4『タイ語』(S 18); 第5『ビルマ語』(S 18)の4冊をNDLで確認できる。

## タイ日辞典

タイの活字 新鑄

がでたとか

10月9日朝 大阪発東京へ

10日 日本言語学会

17日/18日} エスペラント大会

24日 早慶戦

26日ごろ歸ってきます。

東京では江尻, 矢崎, 大久保, 青木の諸氏に會ってきます

昨日「新雪」拝見

\*江尻, 矢崎, 大久保, 青木という面々から『大東亞語學叢刊』の打ち合わせを東京で行う予定であったろう事がわかる。なお余談になるが「新雪」は藤沢桓夫<sup>25)</sup>著小説である。『朝日新聞』に154回連載(1941. 11. 24~1942. 4. 28)された。主人公の養和田良太の恩師湯川丈亮は石濱純太郎をモデルに書かれており、石濱自身も「新雪庵漫談」<sup>26)</sup>など湯川丈亮の名に仮託して投稿するなど関係が深い。その後、同作品は昭和17年(1942)に五所平之助監督によって大映で映画化され同年10月1日に公開された。葉書の日付から見て、公開初日に映画を見たことの報告である。

S 17 (1942). 10. 31

31日

今日アラビアの林昴(タカシ)さんに會いました。辞書をやっているののでいそがしいが、できるだけ學問的なものをだしたい。その中先生のところに行くそうです。

ギリヤク2500部すでに印刷したと印刷所で聞きました。

\*この時点でもアラビア語担当がまだ決まっていないようであるが、ただ林昴氏を候補に考えていたことがわかる。

S 17 (1942). 11. 15

12月15日 大阪言語学会

出席者：中井, 廣瀬, 山岸, 松原, 大島, 川崎, 進藤

25) 義兄である藤沢章二郎(藤沢黄鵠)の子息であり、石濱純太郎の甥にあたる。

26) 「泊園」新第55號(S17. 1. 31)掲載

中井：ソーシャル説に対する時枝の言語過程説を紹介，小林の返答を期待している。

廣瀬：チョーサーと夢

タイ活字 1500円したそうです。

高橋ギリヤク 序説の最後の date を朝日が勝手にけずっています（校正中は復活しておいたのですが）

\*大阪言語学会報告については後述する。タイ活字を購入したことの報告であるが、当時の1500円はかなり高額である。また出版済み『樺太ギリヤク語』の内容に関する朝日への批判が述べられているが、どの時点で削除されたのか、著者に断りもなく削除するとは思えないので笠井信夫に校正を任せて以後の事であろうか。dateの内容がわからないので如何ともしがたいのであるが、その原dateがどこかに残っていることを祈るばかりである。

#### S 18 (1943). 1. 2

沢氏より返事あり／「2月末までに完成の見込」

#### S 18 (1943). 1. 8

江尻から原稿きました。今日朝日で印刷部長などと相談した結果、だいたい朝日で組むことになりそうです。ただシルシのついたローマ字をすこし作るのに2ヶ月ぐらいかかるそうです。朝日の買ったタイ字を浜田へ貸すことはむつかしいらしいです。

\*浜田は印刷所のことであり、奥書に「印刷者 濱田印刷所 濱田正夫」とあるのがそうである。大阪市南区にあったようであるが、現在はすでになくなっていてる。

#### S 18 (1943). 2. 8

今日外語で沢氏に会いました。ソーゴー氏もこの間訪問したよし。「原稿は一すくなくとも文法は一2月中に渡す」。しるしつきローマ字を研究しました。やはり20個くらいいるので、至急一覧表を作って活字を作らすことにします。

\*ソーゴー氏とは次にあげる葉書でも言及される惣郷氏である。これ以降度々名前が挙がっているところから見て朝日新聞出版局編集部実務担当がこのころから橋本周藏より惣郷氏に引き継がれたのではないかと推察される。

#### S 18 (1943). 2. 18

今日澤氏から活字表がきましたので、早速惣郷氏に会って注文しておきました。

タイは5月ごろからでないと組めないと申します。(朝日でしるしつきローマ字を作っているため)。

安南語かマンシュ<sup>マ</sup>ー語<sup>マ</sup>がすこしでもできれば、組みにかかったほうがよいと思います(活字がすぐ使えるので)

惣郷氏の話では澤氏が「某教授(名を言わず)が大東亞語學叢刊目録を見て、浅井氏は二、三年前タガログの独習書を見はじめた。しかしマライ語と同じくすぐ上手になったであろう」

〔惣郷氏曰く「そんなことでうまく書いてくれるでしょうか?」〕

S 18 (1943). 3. 25

25日

沢氏から序説のところだけ原稿が来ました。(以下略)

S 18 (1943). 4. 13

12日にとうとうタイ語原稿が朝日大阪本社工場にわたりました。

インド語原稿も13日に一枚も残らずもラえるそうです。

ビルマ語も一部分でもよいから送れと矢崎氏に申しておきました。ビルマ語は浜田で組ますそうです。

S 18 (1943). 4. 28

24日

沢先生、惣郷氏ラと会見。沢先生はさらに原稿を訂正増補やられることになりました、例えば詩をもっと文學的に改訳する。語彙の増加。まだ3週間しないとタイのローマ字もインドのローマ字も出来ないとのこと。もっともタイ語は日本語の部分のみは活字を捨ててあるあるとのこと。印刷部長はぜひ朝日でペルシャ語の活字をつくらしてほしいと沢先生に言ったので、先生非常に喜んでおられます。来月言語学会へ出席とのこと、矢崎氏は原稿は全部できてカラでないと渡せないと言ってきました。

S 18 (1943). 5. 13

歸ってみたラ、惣郷氏からハガキが来ていました。

ローマ字活字がいよいよ来て、目下鑄造中。  
インド語原稿は 17 日か 18 日に入手のはず

\* ここまでは順調に原稿が集まりインド・タイのローマ字作成に時間を要すること以外は出版事業が問題なく進んでいたような印象を受ける。

### S 18 (1943). 6. 3

タイ語は「歴史」のところだけ初校が笠井のところまで行ったとのこと。

現代实用印度語辞典（翻刻版）

B 6 662 ページ／定價 8 円／〒 20 セン／南江堂 京都／振替 京都 5050

\* 「タイ語」歴史部分が校正担当の笠井信夫へ渡ったことの報告と、恐らく石濱に頼まれたであろう書籍購入のための情報を知らせている。『現代实用印度語辞典』は定価や送料迄明確に記載されているので当時は確かにその存在が確認できたのであろうが、現在その所在を確認できない。おそらく多くの語学入門書や辞書などが出版された一方、今に至るまで残っているものがごくわずかとなってしまった事情が推察される。その中で澤英三著『印度語入門』（1948. 11 朝日新聞社）<sup>27)</sup>は今でも確認できる。他方『大東亜語学叢刊』の『インド語』は結局出版されることはなかった。

### S 18 (1943). 6. 5

澤先生から「朝日はインド語用のしるしつきローマ字を作ると約束しておきながら結局作らなかったのはけしからん。おれが九日に東京に行くから、自分が作ってくる」と書いてこられましたが、これはなにかの誤解かと私には思はれます。先日の朝日の印刷部長の話では「インド語のローマ字はタイ語のローマ字とともに東京に注文したが両方ともまだこない」でありました。しかしタイ語のローマ字はすでに到着しまして、校正刷ができたさうです。インド語もまもなく来るのであろうと私は思います。朝日に澤先生の御得心のゆくようよく説明せよ、とっておきました（惣郷氏が上京中です）。

27) 現在確認できる当時の辞典類は、大阪外國語大學内印度語研究會発行の『日印會話』（1951. 2）『日印會話用語集』（1950. 8）『日印會話用語集』（1947. 8）の3冊；宮本永二著『日常印度語』（1944. 9 出版社不明）；杉武志、大西達朗、矢島鷹尾共編『大東亜共栄圏日用語早ワカリ』（1942. 6 国防同志会）；淺井兵二著『通俗商用印度語會話』（1938. 11 谷河印刷所）；野村佐一郎著『初等印度語研究』（1934 崇文堂出版部）などである。

S 18 (1943). 6. 28

惣郷氏東京で大東亜語学叢刊関係の人々に面会、報告書をよこしました。だいぶいろいろ問題があるようですが、木曜日に御相談にあがります。

「世界言語概説」は9月原稿しめきりで研究社発行<sup>28)</sup>とのこと。

\* 「世界言語概説」上下巻は1952年1956年にそれぞれ出版されるが、大東亜語学叢刊の執筆者とはほとんど重ならない。浅井恵倫と矢崎源九郎の2名だけ重複している。

S 18 (1943). 9. 27

大東亜語学叢刊の「編輯だより」の原稿を朝日へ送っておきました。内容は

インド語	梵字採用
ビルマ語	ビルマ字採用
タガログ語	執筆中の／確報
岡倉賞記念会	
以上です	

30日(木)進藤氏が原稿を持参されるので、ともにおうかがいします。

\*大東亜語学叢刊の「編輯だより」なるものの存在をこの葉書の文面から初めて確認できた。実物はもとよりどれくらいの割合で何号まで発行されたのか、全く詳細がわからない。岡倉賞記念会については恐らく『樺太ギリヤク語』が岡倉(由三郎)賞を授与されたニュースを話題にしたものだろうと推察される。次章で改めて詳細をとり上げることとする。

S 18 (1943). 10. 2

惣郷氏から

呉守礼

の住所不明と言ってきました。この前の住所にだしたら郵便が返ってきたさうです。

S 18 (1943). 10. 14

惣郷氏より

「沢氏はインド語は朝日で組むのを全然止めにしまして、梵字を新たに入れてほかの

---

28) 『世界言語概説』上巻(市河三喜、高津春繁 共編1952研究社辞書部)NDLの国立国会図書館内／図書館・個人送信限定で閲覧可能である。info:ndljp/pid/2474131 (DOI) 10.11501/2474131 : 「世界言語概説」下巻(市河三喜氏・服部四郎氏著『国語学』(通号24)所収1956.03)

ところで組ます」という

しかしこの前の会の時は「ペルシャ語」はほかでやることになっていましたが、「インド語」は朝日で現在組んでいるのであり、それを全部駄目にするのはもったいないと思います。梵字だけ沢氏に組んでもらって、いままでのところへ入れたらよいと思います。

S 18 (1943). 12. 1

浅井惠倫氏は／東京 本郷／ 菊坂 82／ 菊富士ホテル  
に移られました

S 18 (1943). 12. 20

21 日

江尻氏から／「タイ語の書き方」／「文献」／の原稿がきましたので、早速今日惣郷氏に手渡ししました。近く校正刷ができましたら、お目かけます。

惣郷氏の話では、天業社も歐文堂も整理されるので、「インド語」「世界の言語」も前途不明、あるいはまた新規まき直しとなるかもしれないとのこと。 「インド語」は朝日で組んだものはすでにこわしてしまったさうです。心細い話です。

浅井氏消息不明とのこと。

\* 近刊となっていた『タイ語』の原稿が校正刷に向けて出版部へ渡ると並行して、文字の問題で『インド語』が中断状況になっているところに、戦時下の出版統制・規制および紙の割り当てといった状況が出版予定に影響を落とし始めていることが読み取れる。さらに、呉守礼、浅井惠倫両名の消息不明の連絡は、戦時下非常時の有様をよく伝えているだろう。この辺りから、徐々に継続出版が難しくなっていったようである。

S 19 (1944). 2. 7

6 日夜

(略)

江尻氏 他の用事で大阪へ来ました。というのは日泰大辞典を大阪から発行するので(タイの留学生と共著) 7 日朝東京へ帰るよし。

矢崎氏も 5, 6 日中に大阪へ来るそうです。

S 19 (1944). 4. 7

## 6日

13日中島（東洋文庫）から葉書がありました。それによると浅井惠倫氏は2月2日に東京を飛行機で立ったよし。

「支那周辺史上」は明文堂で見つけました。

江尻氏 大阪の本屋から「タイ語文法」を出版の予定（紙の特別割當がすでにありました）この方が先にできるかもしれません、あまり朝日がぐずぐずしていると。

\*川崎の予測通り江尻英太郎著『タイ語文典』が大八洲出版（大阪）からこの年昭和19（1944）年に出版された。戦時下の出版事情は厳しく「紙の特別割當」があるということは出版決定と同義だったと考えられる。

## 書簡 4-373 (S 19 (1944). 5. 5)

拝復

タイ語の四校出来ましたので朱と共に二通宛を笠井氏に送り、校正刷一通は別にお手許にお届け致しました。

四、五日前、江尻氏から文法の所一部分、ギッシリ朱を入れて返送されて来ましたが、工場でも四校になっての猛朱に音を挙げ能率にかなり影響を與へるので、今後のお書入れは適宜おとめ下さるやう宜しくお願いします

なほウイグル語の印刷工場は大久保氏の所で、暫く待つて呉れとのことでそのままになって居ります。

山本部長や小倉さんの意向では安南、ビルマ、タガログをまづとりかかって、ウイグル、チャモロなどは、実用語が一冊でも出てからとりかかったらと、～てらど、前のギリヤク語出版の折と同じ御言葉を繰り返されてゐる状態です。何とぞ御了承の上、一度、大久保氏とも御懇談お願い申上ます。 (以上同封の惣郷氏書信)<sup>29)</sup>

## 五日夕

同封の様に惣郷氏から言ってきました。「ウイグル語」というのがよくわからぬためもあるかもしれない。古代のものばかりと思っているのかもしれませんが。新疆省数百万の人々のあること、川崎の外に石浜の原稿もたくさんはいつている（二つを結合したものやう）ことなど、よく大久保氏、山本氏などに理解のゆくようお話しください。先日私が大久保氏に會ったときは「なんでもよろしいから、どうか早く」と言っておりましたが…

ベルシャ字の方は今日中島氏に調べてもらいましたが、字母は百數十個あり、あとまだ

29) 朝日新聞大阪本社用箋2枚に縦書き

今月中に来るそうですが、活字そのものはまだ 30 種ほどしか作っていません。来週の水曜に 180 ほどできるそうです。この 180 を中島氏が調べてくれることになっています（ウイグル語中のものにどれだけ役に立つか）。

特殊ローマ字は印刷所の主人が自ら進んで「いまから準備しておいたらよい」との事です。印刷所自身が準備するというのですから、準備さしておけばよいと思います。

どうかよろしく Kawasaki.-N

追記。午後沢氏を訪問した。朝日の「インド語」も盆までにはできるとのことです。また、ボースがローマ字採用を声明したから、朝日で組んだようにローマ字だけでもよかったかもしれぬ、とも申されました。

林氏ラのアラビア語辞典は 9 月に一まづ完成するそうです。それでその後朝日の「アラビア語」を頼んでやろう、と言はれました。

\*かねてより依頼をしていた林昴氏からようやく大東亞語學叢刊『アラビア語』にとりかかる意向を取り付けたことの報告である。また、「ウイグル語」であるが、予告広告で「キルギス語」としていた川崎自身の担当を「ウイグル語」に変更するつもりであったかと思われる。以後「ウイグル語」に言及することが増えてくることから推測できる。

S 19 (1944). 5. 31

30 日夜

「ウイグル語」は Radlof の傳記の訳を除き全部できました。そろそろ増補してゆくのを楽しみます。東トルコ語では最近では Jarring といふのがだいぶやっています。本を見たいものです。

Deny は羽田明が貸してくれることになりました。

京都へはまだ行きません（近くいくはず）

中島氏（東洋文庫）が近く大阪へ寄ります。彼はどうしても「ウイグル語」中のペルシヤ字を「自分の経験のため」活字を拾ってみるといつてきません。天業社へ連れていくことにしました。”

[マルカルトの osttürkis der Dialekt stuchen には現代語はないのですか?]

書簡 20-2293 (S 19 (1944). 7. 2)

「大東亞語學叢刊」タイ語いよいよページ割実行（切りとってページにはっています）。「朝日年鑑の印刷が 7 月下旬から始まるので、早く片づけたい」と言ってきました。それ

で先生の序文を早く頂きたいです（7月10日ぐらいまでにできないでしょうか）。できたら私までお届けください。

Kawasaki-N

泊園に来ていた「マガタ」氏の住所氏名をお知らせください。

S 19 (1944). 7. 11

11 日午後 3 時

「タイ語序文」受取りました。

早速惣郷氏に廻しておきました。

(以下略 注9 参照)

書簡 6-653 (S 19 (1944). 8. 2)

「タイ語」校正刷を切ってはりましたところ 352 ページになりました。朝日の工員諸君が働かないので、惣郷氏の見當では、「とても今年中には終了しないだろう」とのことです。それで江尻氏に一週間ぐらいでも大阪に来てもらって、活字を拾って訂正すべきところを訂正してもらったら、仕事が進むので、江尻氏に交渉しています。朝日では水、木二日しか「タイ語」に當てていず、それも他の急ぎのものがあれば駄目になります。もすこしで全部終了になるのですが、困ったことです。いずれにしろ「印度語」の方が先に出来ます。

「ウイグル語」は原稿全部天業社に 27 日に渡しました。沢氏の「印度語」もほとんど組めたので、すぐ「ウイグル語」にとりかかるそうです。全速力で校正を進行させつもりです。あるいは「タイ語」より先に出るかもしれません。

大久保、矢崎、浅井氏に催促状をだしておきました。おそらく「トルコ語」だけが今度まもなく来ると思います。

Kawasaki-N.

沢氏、林氏と今日大阪外事専門学校で話し合った結果、私は「西南亞細亞研究所」に明日からはいることになりました。林氏のアラビア語辞典の助手です。「とにかく英訳、フランス訳だけを日本語に直してくれ」とのことです。だいたい毎日晝間出勤しますが時間はあまりやかましくないので比較的楽です。「大東亞語學叢刊の校正など用事のあるときは休んでもよい」との許可も得ました。実は助手の伴氏（大阪言語學會會員）が 2 ヶ月ほどで應召されたため、林氏が助手がなくて弱っておられるためです。私のアラビア語

の経歴は中野氏に夏に講習會を受ただけですが、ウイグル語にもアラビア語がはいっており、どうせアラビア語は勉強せねばならないものですから、私には都合がよいのです。

ただ「三足の椅子」であるべきを「カナエ」と訳すようなことはやるだろうと思えます。が、それは林氏が後で原語の辞典を引いて訂正するから、とのこと。月給は100円です。林氏自身すらこの研究所では90円で、沢氏も100円ぐらい、榊老博士は102円とのこと。

Kawasaki-N.

メイエ「世界の言語」上巻は8月末に印刷、10月ぐらいにだすそうです。下巻は来年の話とのこと。

\*文中の林氏とは林昴であろう。月給ほか「大東亞語學叢刊の校正など用事のあるときは休んでもよい」との許可を得るなど、随分待遇の良い受け入れであったようだ。当時並行して進められていた泉井久之助監訳『世界の言語』の進捗状況にも言及がある<sup>30)</sup>。

S 19 (1944). 11. 1

28日ニ朝日デ山本部長ソノ他ト集リマシタ。結局「執筆者ノトクソクヲモットヤリタイ、ソノタメ朝日ノ方カラ人手ダスカラソノコトヲ了解シテオイテホシイ」トノコトデス北京、台ワン、東京ヲ頼ンデオキマシタ。

\*この督促を受けて諸方から返信があったうちの一つが注20にある倉石武四郎 S 20. 1. 22 付葉書であり、さらに次の川崎の書簡からも事情を知りうる。

書簡 20-2304 (S 20 (1945). 1. 26)<sup>31)</sup>

今日惣郷氏からつぎのような手紙がきました。

高倉氏は「かねて、原稿にはとりかかってみましたが、その後、久しく何の話もないし、時節柄、朝日の方であまり氣乗りしてゐないのではないかと考へて、実は中たるみの感じで、大変おそくなったが、朝日で断然出版の意向があるなら、極力急いで三月頃までには必ず原稿を渡すようにしたい」

今西氏「一昨年石浜氏から話があった際、少し日時を下さるなら御引受けしても良いと返事を差上げたが、その後石浜氏からも朝日の方からも何ラ話なく、結局これは立消にな

30) 『世界の言語』編集の経緯は注1) に挙げた玄 2023 参照。

31) 消印部が切れているため月日のみの確認しかできないが、内容から見て昭和 20 (1945) 年であることはほぼ間違いないであろう。

ったものと思ひ、全然手をつけてゐない、今カラすぐといはれても到底間に合はぬので、この際お断りするほかはない。

以上が朝日の北京支局の得た情報だそうです。惣郷氏は今西氏は石浜氏からいま一押すればよいのではないカラ言っています。タイ語の奥付に今西の名前をそのままにしておくかどうかと聞いてきています。

Kawasaki-N.

(以下略)

書簡 6-672 (S 20 (1945). 2. 1)

2月1日

大阪外事専門学校圖書課事務嘱託は3月1日より、ロシア語講師は4月1日よりです。事務嘱託は兼職を禁ずると夜學(土佐堀青年会)も止めることになりました。それで大東亞語學叢刊のほうも私は編輯者の名前をとります(つまり本の後に編輯者としての名前をださないこと)。そして謝礼は従来例のごとく石浜先生へ一括していただきます(つまり私が直接朝日から金をもらわないことにします)ただし索引その他の実際の仕事はやってゆきたいと思っております。

結局待避壕にはいったようで、キュークツですが、ブッソウな世の中ですから、當分やむをえません。

以上

Kawasaki.-N

なお、私の勤務種類変更はまだ秘密になっております、「とくに学校内に知れないように」との命令をうけています。

\*これ以後、川崎葉書書簡から大東亞語學叢刊に関する記述はほとんど見られなくなっていく。「結局待避壕にはいった」まま、立ち消えてしまったと考えられる。

以上が川崎の書簡から見た大東亞語學叢刊出版の顛末である。ほかの関係者の書簡などからまた別の見方も出てくる可能性はあろうが、後続出版ができなかったのは、執筆者の死亡などの個別の事情のほか、特殊文字の扱いに付随する印刷上の問題、戦時下の出版業界抑制や紙の配給不足などによる制限、編集者川崎自身の職位変更などの理由によるだろう。

#### 4 大阪言語学会の活動

大阪言語学会の詳細に関しては長田俊樹『大阪言語学会要覧』について－日本言語学史拾

遺 (1)<sup>32)</sup>に詳しい。よってここでは川崎の書簡から例会開催の確認、補足をするにとどめる。まずは時系列順に川崎の書簡中に見える大阪言語學會関連情報を検討していこう。

#### S 17 (1942). 2. 10

大阪言語學會では先生のお話の後で「日本語で書かれたタイ語独習書」をちょっと私がやります。バンコックと大矢氏のものの簡単な紹介です。

(以下略)

\*上掲の長田俊樹 2021 で、

創立総会並 第一回例会

昭和十七年二月十五日 懷徳堂にて

石濱純太郎 ツングース語族に就いて

川崎 直一 日本語で書かれた泰語独習書

と記録されているのに合致する。これが創立総会を兼ねた第1回例会であった。

#### S 17 (1942). 3. 7

(本文略)

〔語學雑誌のこと、火曜日に先生から大塚氏に話して見られたらどうでしょうか?〕

\*注 16 に引用したように、宮武正道『マレー語』の事を自身で急かしている事を伝える文面に添えて語學雑誌についての提言である。『マレー語』は、前述の通り S 17. 4. 20 に出版された。語學雑誌については未詳、大阪言語學會論文集のことならば多少関連はある。

#### S 17 (1942). 3. 24

26日-1日 鳥取, 三朝, 湯原, 津山方面旅行します。

4月大阪言語学会。川崎「エストニア語概説」をやります。以下毎月フィン・ウグル語を一つずつやってゆきます。

Chiba, The Wowel ができましたカラ、兼弘（大商大）氏にでも批評してもらったらどうでしょう。

雑誌 そろそろ陳容をととのえては、私は「エストニア語概説」とマスペロ（タイ語のアクセント）を書きます。

32) 古代文字資料館発行『KOTONOHA』第228号（2021年11月）  
<https://kodaimoji.her.jp/pdf15/yoshiike228.pdf> で公開されている。

\*葉書には4月とあるが、長田俊樹 2021 によれば開催は5月17日だったようである。記録は次の通り

昭和十七年五月十七日

川崎 直一 エストニア語概説

舛田 武雄 蒙古字改良案をよんで

S 17 (1942). 11. 15

12月15日 大阪言語学会

出席者：中井、廣瀬、山岸、松原、大島、川崎、進藤

中井：ソシュール説に対する時枝の言語過程説を紹介、小林の返答を期待している。

廣瀬：チョーサーと夢

(S 17. 11. 15 (p.94) の再掲にて以下略)

\*ここも日付に異同が見える。記録では

昭和十七年十一月十五日

中井 玄英 言語構成観と言語過程観

広瀬 チョオサアの夢

この葉書の記載は研究例会当日終了後に報告として投函したものであると考えられ、12月というのは川崎の書き誤りであろう。

S 17 (1942). 12. 13

宮本 到

勤務先 三和銀行 審査課

自宅 (住所略)

ハンガリ協会会員で語学に熱心です。大阪言語学会の例会の通知がほしいとのこと。よろしく願います。規則書があったら送ってやってください

池川氏曰く来年石浜氏のハンガリ文化講座をお願いしたい。

\*入会希望の人物紹介メールは消印なしの葉書で藤枝了英（甲南高校講師 京大シナ哲出身 堺市…）を紹介するものが他にもみられる。

S 18 (1943). 8. 30

30日

8月は大山まで行ったりして怠けましたが、大阪言語學會論文集の私の原稿は今日やっ  
と書き上げました。「エストニア語中の借用語、外来語」で11枚です。

倉敷で国分氏に會いましたら、なにか書くと言っていました。

これから「ウイグル文法」にとりかかります。

\*『大阪言語學會論文集』が発行されていたあるいは発行予定であったことがこの文面からわ  
かるが、現在その存在を確認できていない。

#### S 18 (1943). 9. 7

9日-20日ごろまで一家全部紀伊富田に行っております。

大阪言語学会論文集は歸ってから編輯いたします。

19日大阪言語学会例会は缺席すると思っています。

\*論文集の編纂がこの時点でまだ完了していないことがわかる。さらに欠席連絡であるが、長  
田 2021 の記録によると次の通り川崎本人が発表しているので、19日から26日開催へと日付  
が変わったために参加可能となったようだ。

昭和十八年九月二十六日

石浜純太郎	ギリヤク語の研究と高橋先生の素顔
川崎 直一	岡倉賞について
高橋 盛孝	ギリヤク語とその文献
展 観	ギリヤク語研究資料

この時の例会は高橋盛孝『樺太ギリヤク語』が岡倉賞を受賞したことに因み開催されたよう  
である。受賞に関する高橋自身の言を葉書から引用しておく。

高橋盛孝 S 18. 6. 25 付石濱宛葉書（原文縦書き）

拜啓「ギリヤク文法」に対し、今回岡倉（由三郎）賞を授与され、廿七日日曜上京受納  
致し候 これ亦先生のお蔭と感謝仕り居り候  
右一言 御礼迄

#### S 18 (1943). 9. 9

笠井／宮武] いそがしいからとて大阪言語学会の原稿を書かないと言ってきました。

国分／進藤] 氏は書くと言いました。

どれだけ揃うでしょうか？

〔ウイグル文法はどどん書いております〕

大東亜通信 9月4日号 左山, 大東亜見聞記中に「…石浜「支那語論考」を読む. 讀みだして興味湧き支那古典の考証の緻密なものには敬服した. だが同君一文中の古い支那を知らずして新しい支那はわからない, との話は常識的に言はれること乍ら, もっともの様で支那古典専攻者の独断である」

\*大阪言語学会論文集の原稿が集まらず苦慮しているさまが読み取れる。また、大東亜通信の記事を報告しているが、これに対する川崎自身のコメントはない。

S 18 (1943). 10. 20

大阪言語學校会場の承諾を得ました。

24日

大阪市西区新町北通一丁目 56

東亜語學普及社／電話 新町 4051／(主人は大西氏)

\*昭和 18 (1943) 年 10 月 24 日の例会は記録では

昭和十八年十月二十四日

国分 敬治 我国に於けるプラトン研究に対する一つの反省

石浜純太郎 劉猷廷の言語学

とある。

以下 1946 年以降の例会については長田 2020 記載の記録との対照のみ記載していく。

S 24 (1949). 9. 30

高倉氏の件承知しました。ただし案内わずで印刷にだしたかもしれません。高橋氏のギリヤク語の新資料と長田氏の原始日本語だけですから、高倉氏が加っても時間があります東京のエスぺラント大会で浅井エリン氏に會いました。石浜氏から「静安学社のプリント」を前にもらったが、失った。も一度送ってほしい、と言っています。もし送られるのなら、ついでに大阪言語学会要ランも入れておいてください

\*長田 2021 記録

1949 (昭和 24) 年 10 月 9 日

高橋盛孝 ギリヤク語の新しい資料

長田夏樹 原始日本語の音韻とアクセントに就いて

高倉克己 支那語法について

S 24 (1949). 11. 12

12日

昨日もエスペラントの重要な会合がありましたので、長田君の話 途中でやむなく歸りました。

「ウイグル語」の研究費が今年もきましたので、これを一時流用して、大阪言語学会で出版したいと思います。ちょうど長田君の「トルコ、モーコ比較言語学」が手ごろです。商品価値もあります。写紙わ橋川さんのむすこ（学生）に切ってもラッタラ、費用もすくなく、正確にゆくと思います。長田君に頼んでおきました

17日から1週間ほど東京え行きます。東洋文庫まだだめですか？

[西夏語わ大阪外大學報第2号でだします。]

\*この文面から S 24. 11. 11 に例会が開催され長田夏樹による発表があったことがわかるが、長田 2021 には言及がない。

S 25 (1950). 4. 1

大阪言語学会を4月9日にやる予定でしたが、入学試験の会議があるためダメとなりましたので、4月16日（日）にいたします。（松原氏発送の案内のハガキでわ9日になっていると思いますが、これわすぐ訂正します）

なお、4月から京大で西夏語を講義されるよし、水曜日の午後なら、私も高槻の帰りに聴講したいと思っています、手続わ学校からしてもらいますが、何日何時から始められるのか、おしらせください。

\*S 25. 4. 16 開催の記録も今のところ確認できない。

S 25 (1950). 8. 27

Nevsky 原稿 いつごろとりにあがったらよろしいでしょうか？

9月の大阪言語学会 先日の“スターリンの言語学批判”のお話を願えますか？どんな題にしましょうか？

渡辺格司氏にも交渉しましょうか？

私の論文の題目わお考えがつかしましたか？

\*昭和 25 (1950) 年 9 月期の例会記録も確認できない。

S 27 (1952). 9. 12

## 大阪言語学会

9月28日(日)

村田、伴 でやります。

Nevski 辞書(西夏語)まとめましたら、おとどけください。はやく出版さすような手配にいたしますから。

\*先に挙げた書簡6-653(S19.8.2)の中で川崎が「西南亞細亞研究所」に入ることになった契機の理由に挙げている「助手の伴氏(大阪言語學會會員)が2ヶ月ほどで應召されたため、林氏が助手がなくて弱っておられるため」とある伴氏である。長田2021に「伴康哉(1918-2013)は大阪外大でアラビア語を教えていた方で、三度例会で発表している。」と説明されている。

## S28(1953).5.30

高血圧とは困りましたね。大阪言語学会の方は6日に会をやる通知を刷了していますが、延期しましょうか？

水曜か木曜におかがいするつもりでしたが、急に会ができて行けず、連絡ができませんでした。

以上が川崎書簡から見た大阪言語学会の実態である。多少なりとも補足できた点があれば労をいとわず詳細に整理してきた作業が報われ幸いである。

## 5 まとめ

今回は川崎直一の書簡を通じて『大東亞語學叢刊』の出版と大阪言語學會の実態について詳細にその足跡をたどってみた。石濱純太郎の主唱により五島忠久と共に発起人として大阪言語學會の創設にかかわり継続して幹事を務めた川崎の仕事ぶり、石濱純太郎とともに大東亞語學叢刊の編輯者として実務に携わった苦勞など、大きく東洋語学へ貢献してきたことがわかる。

戦前戦中はある意味で東洋語学に対する国の手厚い補助があった時期ともいえよう、その目的が多く他民族を統治下におくことにあったにせよ。そのような気運の中で学者・研究者がどのように時世をとらえふるまったか、非常に興味深い。川崎は病弱で保養により学歴が途絶えることもあったようであるが、政治色を嫌い、純粋に言語に対する興味に動かされて研究を継続してきた姿勢が垣間見える。あまりにこだわりがあるため時として編輯作業に遅れをとったのではないかと思えることも間々あるが、そのような川崎を取り込み銜うことなく共に歩んだ石濱純太郎の為人にさらに感銘を受けることとなった。